

コール・アカデミー

I. 創立と大正年間

大正9年9月、本郷に音楽部が誕生した。この事情はオケ史に詳しい。音楽部といっても母体は器楽が中心で、声楽は、沢崎定之氏の独唱が行われた程度であった。男声合唱として、初めてまとまるのは大正11年であり、沢崎氏の指揮でヴェッテルリンクの小夜曲、ヴォルガの舟歌、ノルドラークのヤ・ヴィ・エルスケル・デッテ・ランデットを歌っている。当時は、オケと合唱が未分化で、管弦楽を演奏した後、そのままのメンバーで合唱をやるケースが多かった。しかし合唱専門という人もいなかったわけではない。斎藤齊氏、瀬名貞利氏、長井維理氏などは合唱の発展に力を尽した。大正11年12月のペーターベン祭には、フィデリオより四人の合唱をオケ伴奏で歌っている。大正年間の曲は、ブラームスのドイツ民謡、クロスの作品、グリークの作品、ペーメヤペーターベンのものであるが、当時としては珍しいものであった。大正14年には、シューベルトのミサ、斎藤英子氏の独唱でブラームスのアルトラプソディー、51年にはシューマンの作品を演奏し、その中には、昭和45年のドイツ演奏旅行に持って行った“ミンネゼンガー”も見られる。

故斎藤齊氏は、当時のこと及び沢崎定之氏について次のように書いている。「私のはじめて音楽部に参加したのは大正10年か、11年で、はっきり覚えているのは大正11年ペーターベン祭として催された第4回演奏会に出演したことだ。(中略)私の参加以前には神田のYMCAで「ヴォルガの舟歌」がアンコールされたと言って部員も指揮の沢崎先生も喜んで居られたことを思い出す。沢崎先生には中学時代から個人教授を受けていたので、それが入部の機縁となった。

ここで少し沢崎先生のことを書こう。先生は上野でも教鞭をとられ、又歌手としても活躍されて居られたが、我々の合唱を指導することに特別な興味を持って居られた。其上、文化的指導者としての一種の責任を感じて居られて常にアカデミックな方針を堅持して居られた。大正14年には早くもブラームスのアルトラプソディーをやって、其の最後の歌詞の主旨のように、とに角、深い音楽の世界に我々の目を開けて下さった。そうした行き方は文化の一つの中心であった東大の音楽活動に対する先

生の理想であったのだが、此仕事については遺稿の序文で信時潔氏が大きな功績として高く評価して居られる。我々の合唱団がこうした伝統を持ち続けて来たのも一つには最初に深く根を下ろされたこの指導方針によると思うが、又一方学生の趣味も同じ傾向をとって居たからに違いない。(中略)

初期の演奏会で印象の深いのは第4回と第10回だ。第4回は何しろ本場の音楽学校へのりこんでやるのだから張り切ったものだった。演奏の結果は沢崎先生が上野で好評だと言って喜んで居られたのと、近衛秀麿氏が朝日新聞に書いた批評で、コーラスを非常にほめて居たことから見れば、まんざらでもなかったのだろう。

昔歌ったものを歌って居ると不思議に其頃の記憶が甦って来るものだ。瀬名氏と二人で毎週譜面を刷った事や、部室の隣りから入って来る第三食堂の香り、或は又練習で「ソレ大変困リマス」とか「ソレデヨロシエヘ」と言う沢崎先生の独得の表現、電車の中でまで練習した楽しい気憶。(中略)瀬名、長井、坂本氏などとOBコアを作って毎週水曜日に練習をし、演奏会にはとび入りで歌って居た。戦時中は、練習の半分は雑談で、毎回談論風発と言う状態になり、其の面の楽しみでも集会は盛んだった。」(音楽部35年史より)

II. 昭和初期 (太平洋戦争まで)

§ 1. 昭和にはいって

昭和8年頃までは沢崎定之氏の指揮で、合唱が続けられていたが、この頃のことには卒業生名簿や他の資料が不足で、くわしいことは分らない。ただ演奏会には毎回出演し、主にドイツ民謡を中心とした小品を3曲程度歌っていたようである。オーケストラ伴奏の曲も少ない。ブルッフ作曲「海賊の歌」、ペーターベンの「四人の合唱」をはじめ、昭和5年にはブラームスの「アルトラプソディー」を斎藤英子夫人の独唱で再度とり上げ、昭和10年には、斎藤齊氏独唱、ピアノトリオ伴奏によるスコットランド民謡を本邦初演している。オーケストラと合唱は、まだ完全に分離した活動をとっていたわけではなく、協演することも多かった。

§ 2. 戦前の頂点

昭和11, 12年頃には伊藤武雄氏が合唱指揮を担当された。ちょうど昭和10年には颯田琴次教授が音楽部長に就任され、音楽部が一段発展した時期であった。

“うるわし
春よ”

この頃のオーケストラには優秀な人が多く、繁田裕司、柴田南雄、安藤晶、少し遅れて入野義朗等の諸氏が、音楽部室に集まり、その才能を開花させていたのであるが、合唱団の方にも優秀な人材が輩出していた。“いわゆる音楽キチガイがオケに劣らず相当数いた”らしい。また当時の音楽部室が、第三食堂(実学教室の東にある。)から、現在の第二食堂の建物に移っている。そのために、それまで部員には医学部生が多かったが次第に工・理学部生も増加した。また当時の部員には、東京、成蹊、成城各高校の出身者が多く、オケと合唱の幹事の間に親密さが増した。連日、昼休みにも音楽部室は有効に使われるようになった。このような背景の中で、三末鶏郎(=繁田裕司)氏の編曲になる、オケ伴の *Wie Schön ist es!* が生れた。この「歌声ひびく野に山に」は昭和11年11月の第24回演奏会で初演されて以後、東大音楽部の恒例番外(アンコール)となった。春の演奏会では、「うるわし春よ、みどりにもえて……」と歌い、秋の演奏会では、「うるわし秋よ、もみちにもえて……」として、共に聴衆といっしょにカノンで歌われた。なお、これは現在のオーケストラにも引き継がれている。

この頃の曲目を見てみると、相変わらず、シューベルト、ブラームス等のドイツ曲が多い。変わったものでは、フォスターの作品、黒人霊歌が初めて顔を出し、オペラものも、ヴェルディ、ベルリオーズに及び、また、昭和16年には、オケ伴で、ヨハン・シュトラウスの「美しき青きドナウ」を演奏している。

当時、定期演奏会の出演者は昭和13年11月の第28回定演をとれば、オケ52人、合唱34人であった。会場はいつも神宮外苑の日本青年館で、収容人員は1000余であった。(なお、この時代のエピソードについては、穂坂直弘氏の回想文を参照されたい。)

§ 3. 戦争の激化

昭和11年には2・16事件、12年には支那事変が起り、戦火は広がりつつあった。これをしり目に、音楽部は戦前の頂点を築いたわけだが、昭和16年12月、太平洋戦争が勃発すると、合唱活動にも大きな支障をきたすようになって来た。人数も次第に減少の傾向をたどった。曲目も、枢軸国のものしか認められなかった。また、“燃ゆる大空”(山田耕筈)“海行かば”(信時潔)、独逸軍

歌集、日本軍国歌謡集、などが、定期演奏会にとりあげられるようになった。昭和14年には、「皇軍将士傷痍軍人慰問の午後」に出演し、昭和18年の定期は、出陣学徒壮行演奏会であった。当時は、音楽部室の奥の三角の部屋が配属将校の部屋で練習するのも気がひけたということである。そこで、軍事教練視察の時には、音楽部員が一役買って、配属将校をもり立て、ゴマをすった、というエピソードも伝わっている。

昭和18年秋の定期からは、会場も日本青年館から、本郷の法文25番教室に移された。昭和19年に入ると、本土空襲が始まり、残った学生も軍需工場などに動員され、もはや音楽どころではなくなった。

III. 戦後の復活と興隆(昭和20年代)

§ 1. 戦後の復活

太平洋戦争も、日本の敗色が目に見えてくるころまでは、東大の音楽部も息が続いていた。しかし昭和20年には、まず授業が成立しなくなり、残った学生も軍需工場その他へ動員され、活動は完全に停止した。昭和19年の五月祭りより、21年に五月祭が復活するまで、音楽部にも空白期間が記された。昭和20年秋には、学徒復員により、キャンパスには再び学生が舞い戻り、本郷通りにも活気がよみがえったが、音楽部の再建も次第に有志の間で論議されるようになった。音楽部長颯田琴次教授の尽力もあり、昭和21年の五月祭を旨として、活動を開始することになった。当時、世間は相当な衣食住難と闘っている最中で、学生も音楽どころではなかったが、菊池維城氏をはじめ合唱団の再編成に情熱を燃やす若者達は、当時工学部を中心に活動していた混声合唱団「白バラ会」のメンバーの助力を得て、五月祭には30人位で演奏会を行なうことができた。それ以後も、NHKの放送に出演するなど、定期的なスケジュールを組むことができた。(この時のエピソードについては、当時の最大の功労者である菊池維城氏の回想を参照されたい。)

指揮者については、颯田音楽部長や前指揮者伊藤武雄氏の助言もあって、藺田誠一氏に決定した。藺田氏について、昭和22年の委員加太静男氏は次のように書いている。「この21年の五月祭から、指揮は藺田誠一氏が担当されました。練習には8人位しか集まらず、あたかも藺田先生の個人レッスンの如くしぼられ、いやでも歌わねばなりませんでした。食糧事情もひどく、世の中に何のいこいもなく、紅茶一杯飲めぬ時代です。唯一つ慰いを合唱に求めて来る人々は、本当に熱心でした。21年の色

色の行事を終って秋のコンクールは、一寸意気込みすぎで優勝を逸したものの立派な男声コアの骨組が出来て来ました。」(音楽部35年史)

また、この昭和21年には、NHKの放送番組、「愛唱歌の時間」に出場することになり、「コールアカデミー」と初めて名乗った。以後、この名前は定着した。

なお、この終戦直後の再建、及びコールアカデミーの誕生のいきさつに関しては、菊池維城氏の回想及び座談会「藺田誠一氏を囲んで」の中に詳しいので参照されたい。

§ 2. コンクール期

昭和22年11月には、第二回関東合唱コンクールにコールアカデミーとして初めて出場し、大学高専の部で優勝している。指揮、藺田誠一氏、曲目は、グノー作曲歌劇「ファウスト」より兵士の合唱であったが、優勝の感想を当時の委員加太静男氏はこう述べている。「うれしくて、鬼の首でもとった様な気持とはこんなものかもしれない。悪条件がそろって、今年も駄目だと思いつつ、なお野心をすてなかった。さていよいよ早、日、慶、共立など定評ある合唱をきくと、いつも高等学校ばりの蛮声と荒っぽい表情とを持った我々の未熟さがひしひし身にしみた。ただ人数が50人近くいる事が何よりの取柄だ。(中略)我々はただ美しく合唱したというだけで、内面から盛り上げて、人に迫るという所が足りない。これを機会に、唯楽しいからというだけでなく根本にあるものをしっかりとつかんでゆきたい。」(当時の音楽雑誌より)なお、この時の一般の部の男声合唱では、伊藤武雄指揮の東大YOB合唱団が優勝している。(YOBはYunger O.Bの略。当時OBによる合唱団も復活し、いち早く活動を始めていた。戦前の古い世代のOBと、卒業してまもない若いOBとは、別々に練習活動を行っていたが、前者をO.O.B. 後者をY.O.Bと呼んでいた。とにかくOB合唱団も盛んに活動していた。)

続く昭和23年の関東合唱コンクールにも出場し、コールアカデミーは前年に続いて優勝、総合の部でも第一位という栄冠をかち得ている。曲目は、藺田誠一氏指揮による「タンホイザー」の“巡礼の合唱”であった。この年から全国合唱コンクールが開始され、西部、関西、東海、関東各地区の優勝団体が参加している。(注1)この時の様子は、座談会「藺田誠一氏を囲んで」の中に詳しいが、学生の部で一位と判定されながら後に定員を1名オーバーしていたことが判明し、失格している。

昭和24年度の第四回関東合唱コンクールでは第二位(注2)、昭和26年度の第六回コンクールでは第三位と

毎年コンクールには出場していたが、成績は当初ほど目立たなくなっていた。

コールアカデミーにとって、戦後の一連のコンクールは、活動の一つの柱であり、他大学の合唱団に比して、比較的早く戦後の活動を確立させる原動力となった。この際には、当時の部員の情熱もさることながら、指揮者藺田誠一氏の功績を上げておかねばなるまい。

なおコンクール出場は昭和28年を最後に、コールの活動より姿を消す。

§ 3. オケとの関係

この頃には、オケとコールの活動は別々に行われ、両方に属している部員はほとんどなかった。戦前は両者がかかなり交友的だったが、この頃にはおもしろい話が残っている。「……部室の使用と関連して、合唱団との関係を書落す訳にはゆかない。音楽部室の使用権は、東大音楽部を構成するオケラとコールとが持っていたが、私が入学したとき、そのほかに、「リールクラブ」「白ばら会」「古典音楽愛好会」「丁友会」といった各種の合唱団が定期的な使用権を与えられていた。当時の部室は、それらの団体の使用のほか、オケラとコールが週2回づつ使用するという、まさに国鉄のダイヤ並みの混雑ぶりであった。我々が不便と不愉快を感じていたのは事実だが、当時としては如何ともし難かった。

それだけならよいが、やがてコールとの間に練習日のことで問題が起った。「コールとしては、先輩を迎えて練習したいので、従来昼だった練習時間を夜にとりたい。かつその火、金は動かせないから、オケラが練習日を動かしてほしい」ということだったと思う。しかしオケラの方が昔から火、金曜日に先輩を迎えてやって来ているのだから、コールの申し入れは大変一方的で不届きなものであった。しかし結局オケラが譲ってその件は落着いたように記憶している。当時のコールは、藺田誠一

(注1) 全国合唱連盟理事長であった小松耕輔氏はプログラムの挨拶の中で、「……我々はこの日の来るのをどんなに待ちこがれていたことでしょう。国民皆唱の実現もいよいよ軌道にのりまして我々は更に共に共に協力してこの芸術的社会運動を推進し、我が国再建の一翼をにない、文化の華の咲きほこる楽土を築こうではありませんか。」と述べている。当時、戦後の物質的、精神的荒廃状態の中で、合唱活動がまさに一明の光のように人々の心の中に浸透して行った様子が、この言葉からもよくうかがえる。

(注2) 因みにこの年の全日本合唱コンクールでは、学生の部で早大音楽協会合唱団、一般の部で関西学院グリークラブがそれぞれ優勝している。

氏指導の下に、合唱コンクールで優秀な成績を取めることが多く、プロ並みの実力を誇っていた。一方オケラと
いえば、時には聴くに堪えない音を出す。こうしたいわば技倆の差が力関係の差になって、この事件の結着として現われたといえるかもしれない。とも角、過去においてオケラとコールを併立させてこられた先輩諸氏には大変申し訳ないことながら、我々の卒業のころはオケラとコールとはすっかり疎遠になってしまった。」(日江井英夫：東大オーケストラ45年史より)

§ 4. 昭和20年代中期

昭和20年代中期は、一方でコンクールに出場しながら、その他学内外の活動もさかんであった。24年5月には、高田信一指揮、東京フィルハーモニーの管弦楽、川崎静子の独唱で、ブラームスのアルトラブソディーをやり、その他、五月祭をはじめ、中学生の為の音楽教室、戦災孤児救済音楽祭、クリスマスコンサート等が、のき並みに開催されていた。

当時のレパートリーは、シューベルトのミサ曲、ドイツ民謡集、オペラ男声合唱曲集など、ドイツものが主であったが、26年にはフォスターの作品、27年には清水脩の「月光とピエロ」、28年には黒人霊歌など、当時としてはかなり意欲的と思われる曲もとり上げている。また26年の五月祭には、現在コールアカデミーのエルである応援歌「ただ一つ」が初演されている。

とにかくこの昭和20年代中期には、部員も多く、何か演奏会を開くとすれば、100名近く動員することができた。優秀な人材も多く、部員の編曲、作曲による曲も多く演奏されていた。

コンクール優勝期から4年位は、コールアカデミー史上、一つの頂点を画したといつてよいだろう。この期間を一貫して指揮をつとめた藺田氏について一言触れておくと、氏の棒は、細部をいじるよりもむしろ、大らかなロマン的な流れを強調するものであったこと、ゆえに、「曲を歌わせる」という形容がピッタリだったこと、また練習指導は、懇切丁寧で徹底したものであったこと、(入沢氏談)を言えるようである。とにかく、現在に至ってもOB諸氏から「ソノちゃん」という愛称で呼ばれる氏の人柄は、当時のコールの部員から大きな信頼と尊敬を受けていたと言えよう。なお氏は、27年まで現役を指導され、30年代からは東大OB合唱団の指揮をつとめている。

IV. 学制改革以後 (昭和30年代)

§ 1. 学制改革とその波紋

コールアカデミーがまだコンクールに出場し、優秀な成績を修めていた昭和24年、学制改革によって新制大学が発足し、駒場には新たに教養学部が誕生した。(注1)以後2～3年は、まだ旧制入学の学生の時代が続き、つまり、一高=東大のルートが残っており、コールも大きな影響は受けなかったのであるが、大きな波紋は4年遅れて昭和28年頃にどっとおし寄せた。当時の庶務委員新元久氏は次のように書いている。

「私が駒場の教養学部から本郷に進学して来た28年の春には、コールは非常に停滞していた。24年度に、学制改革により駒場に教養学部が出来た時に、コールは駒場に積極的に働きかけず、本郷だけで固っていた為に、駒場に入って来たコーラスを愛する者達は、柏葉会という立派な合唱団(注2)を作ってしまった。そこで、我々の様にコールに入る事を希望していた者迄もが、地理的な不便さから皆柏葉会に吸収されて、駒場からコールに入る人はほとんど無かった。それでも旧制度の学生が残っている間は未だよかったが、完全に新制度に切替って、本郷には三、四年の二学年しか在学しなくなつてからは、部員数も急減した上、夏を過ぎれば四年は卒業と就職を控えて殆ど出席できず、事実上三年一学年のコースとなつてしまった。練習もダブルカルテットぐらいでは、ちっとも楽しくない。そこでますます出席率が悪

(注1) いわゆる6・5・3・3制から、6・3・3・4制へ変わったのである。

(注2) 柏葉会：昭和24年4月、駒場における教養学部誕生と同時に発足した混声合唱団。女声部は、実践女子大を中心に構成したが、現在では、大学を問うていない。

(注3) 東京六大学合唱連盟の発足

それより先、昭和20年代半ばには、コールは2～3年後の危機など予想もできぬ程に活発な活動を継続させていた。オケも、芸大並みの人材を多数擁し、まさに黄金時代の名のふさわしい時期であった。こうした状況の中で、六連(東京六大学合唱連盟)の構想が生れた。昭和26年、東京六大学野球の応援歌をNHKスタジオで吹き込んだことがきっかけで、各大学の委員間に六連の構想が生じ、コールの委員岸田功氏が中心になって話がまとまり、次期委員高村邦彦氏の時に第一回六連演奏会が、日比谷公会堂で開かれた。

東京六大学野球にちなんで、同じ六校が一同に会し各団の成果、特色を発揮しつつ、お互いの合唱精神、合唱技術の向上を目指すという意義づけを確認しあい、毎年一回の演奏会を重ねて、現在に至っている。

くなり、28年度のコンクールではみぢめな成績であった。」(音楽部35年史より) (注 3)

§ 2. 危機の打開

**コール騎場
支部誕生** ダブカル程度の練習の続いた状態の中で、当事の委員、関根達也氏、小川安充氏らは、この窮極を何とか打開しようと努めた。第一に人数の確保であった。それには騎場にも積極的に働きかけることが焦眉の急だった。騎場にはコールアカデミーは存在せず、合唱は柏葉会を中心は行われていた。関根氏は柏葉会のメンバーでもあったが、一高時代先輩を通じてコールにも関係があり、コール再建に柏葉会の力を借りようと試みた。

練習は、コールは本郷で、柏葉会は騎場だったが、当時本郷はいわば神聖視されていたようである。本郷での練習と、男声合唱に対するあこがれが、関根氏の努力の背後にあった要因であったと言えよう。こうして柏葉会の男声部の多くは、コールにも属することになり、人数は一応確保され、29年にはコールアカデミー騎場支部が発足した。この時点まで来て第二の目標は、新入生獲得であり、新入生歓迎合唱祭及び、新指揮者前田幸市郎氏のもとでの五月祭ステージには、全力が注ぎ込まれた。こうして次第に騎場におけるコールの成長が着々と実現されていった。

**新指揮者前
田幸市郎氏** 蘭田誠一氏が昭和27年五月祭を最後に、現役コールの指揮者を退き、続いて原田稔氏がバトンタッチして、28年末まで指揮者をつとめた。原田氏の棒による曲目は、黒人霊歌、フォスターを中心とするアメリカ民謡及びヨーロッパの民謡などが主なものだった。しかし衰退ぎみの傾向をたどるコールは、様々な面において新しいものを求めていた。また原田氏もそのようなコールの状態に必ずしも満足ではなかった。

そこで、戦争の指揮者伊藤武雄氏の紹介で(関根氏の気憶による。)現在の指揮者である前田幸市郎氏が、コールアカデミー史上に登場することになる。昭和29年の五月祭が前田氏のコールにおける初ステージである。前田氏が常任指揮をひき受けるに際しては、条件がついていた。すなわち、コンクールには出場しない、ミサを中心とする西欧古典ならば振る、ということであった。

**第一回定期
演奏会** それまでは、コールアカデミーとオーケストラは、メンバーは独立したものであったが、常に同じステージで演奏活動を行って

きていた。しかしこの時点に来て、両団体が量的にも質的にも充実してきていたことから、各団の自立性が確固たるものとなり、各々独自の活動をとることになった。

昭和29年12月3日、虎の門共済会館ホールにおいて、コールアカデミー第1回定期演奏会が開催された。指揮は前田幸市郎氏、曲目は、シューベルトのドイツミサ曲清水脩作曲の「月光とピエロ」、黒人霊歌集、オペラ合唱曲集というものであった。部員数は70名(名簿上)であった。この第一回定期のプログラムのご挨拶には、次のように記されている。「……未だ技術も大変未熟なのですがすけれども、現在の一年生諸君が、三年生、四年生になる頃には、きっと往年の全盛時代を再現してくれるに違いないと思い、この演奏会を新しい出発への第一歩として踏み出したいと思っています。」往年の全盛時代とは、コンクールに優勝した昭和23、4年頃をさすのであるが、コール再建への意欲は部員の間に浸みわたっていたといえる。

§ 3. 大学合唱協会(DGK)の結成

昭和28年、窮極打開の方針のもとに、対外的な試みが計画された。12月には名古屋と京都で合同演奏会が開かれている。「この旅行は、内面的には本郷と騎場を結びつける意味で、又外的に対しては、名古屋大や京大、同志社、立命館の各大学と交換会を持ち、官学私学のセクショナリズムを排して、互いの交流を深め、非常に意義あるものであった。」(新元久、音楽部35年史)これがきっかけとなって、京大や名古屋大との接触が生れた。また当時の柏葉会の指揮者山根一夫氏が、横浜国立大グリーンクラブの指揮者を兼任していた関係で、横浜国大との交流が生れ、昭和29年1月には、虎の門共済会館で、横浜国大グリーンクラブとの合同演奏も行われている。京大や名大は当時歌声運動的な活動を対社会的に積極的に推進しており、新しい合唱活動の摸索に意欲を示していた。またコンクール主義を打ち出す日本合唱連盟に対する反発と、当時結成されていた、慶応、早稲田、関学、同志社の4つのグリーより成る東西四大学唱連盟を、サロンのだと評価する傾きが裏にはあったようである。

(関根氏談)

ここに、コールアカデミー、横浜国大グリー、名大合唱団、京大合唱団が、新しい活動方針のもとに結束し、大学合唱協会を結成するに至った。第1回目の演奏会は、昭和29年6月12日、名古屋市公会堂にて開催された。この大学合唱協会結成の主旨は次のように記されている。「……この時にあたって我々は従来から我国の通常とされたセクショナリズムを脱して一層広い視野に

立ち、合唱の喜びを分つという共通の目標を目指して結合することにより、協会の内部的な交流と向上を図ると同時に一般社会に対しては、文化の地域的偏差を正し、全国に明るい生活の歌声を喚び起すために努力することを決意した。」(規約前文より)

以後、昭和30年には明治大学合唱団、32年には東北大学男声合唱団、東大柏葉会、37年には法政大学混声合唱団が加盟し、現在に至っている。(注1)

昭和30年代前半のコール

昭和33年の第5回定期には、部員数80を数え、大所帯に発展している。当時のコールについて前田幸市郎氏は次の

ように書いている。

「……5年前の第1回定演の頃と比べて、確かにコールはうまくなっている。(中略)少なくとも現在のコールはあの頃のコールが優秀な部員とそうでない部員の差が激しく、合唱団としてのまとまりが不足だったのと比べると、技術や熱心さなどの面で全体的にレベルが上り、合唱団という一つの有機体として動くようになったと言えるだろう。それに伴って、コールという合唱団の個性といったものもどこかに感じられるようだ。強いて言うならば、学生らしい清潔さとも言えるだろうか。」(第5回定演プログラムより)

§ 4. 演奏旅行

昭和31年のコールは、部員40名強で定演を終えた。しかし上級生はあまり熱心ではなく、演奏会直前になるとやっと練習に出て来て、ステージにのるという態度で、そのためかステージも楽符持ちであった。この状況に不満を感じた当時責任者河野広孝氏は、断固たる方針をうち出し、練習に出て来ない怠慢な上級生に自重を求めた。いわば首切りを断行したのである。結局29名が残った。内部のムードを好転させる為に氏は二つの行事を設定した。一つは駒場の学生会館設立基金募集クリスマス演奏会であり、もう一つは三月の休暇を利用した演奏旅行である。こうして昭和32年3月には仙台1ヶ所であったが演奏旅行が初めて試みられた。何しろ初の試みであり財政面や参加人数などの点でかなりの困難が予想され

(注1) 明大が混声と男声に分れた後、昭和36年には、グリーの方が脱退している。コールも昭和44年、活動のあり方のくい違いから、脱退している。これについてはV現代史を参照されたい。

(注2) 黒字に黄ぬきの文字を配したコール券と、黄地に黒ぬき文字の宮城学院券が二枚綴りになったセット券はしゃれたものである。

たが、これを克服して成功させた河野氏の努力は並み並みならぬものであったと言える。仙台案は、当時のコンクールで全国3位に入賞した宮城学院女子大学グリークラブとの交渉から始まった。宮城学院も3月に定演を予定しており、これと提携することになった。チケットもセット券を作り、宮城学院の名を借りて当地に宣伝した。セット券は100円、1枚券は70円であった。(注2) 広告取りもほとんど河野氏1人の手に成った。宿泊は東北大学の明善寮を使用した。粗末なあまり、朝にはフトンに雪が積っていた。昭和32年3月20日のことである。結局この旅行では4千円の黒字となった。これに付随して特筆すべきことは、それまで事実上不可能とされていた1~3月の練習を行うことになったことである。その結果1年間のスケジュールがむらなく続くようになり、秋の試験明け休暇にも強化合宿を行うようになっていった。この方針は現在にまでうけつがれている。

この昭和32年にはそのほか多くの演奏会を持ち、精神的な活動が行なわれた。六連のことに關して次のエピソードが伝わっている。「東大A57型」なるビールスが猛威をふるい、多くの部員に感染、60名いた部員もゲネプロには21名となってしまい、「夜逃げでもしたくなった。」と学生指揮者の大坪氏はもらしたそうである。結局本番は39名で何とか乗り切った。

昭和33年春には、前年の教訓を生かし、名古屋、彦根、松江、広島、宇部、神戸と一挙に10日間にわたる大がかりな計画を実現した。更に34年には、甲府、松本、高田、富山に演奏旅行を行ない、以後3月末における演奏旅行は、完全にコールのスケジュールに定着した。

§ 5. 定期、昭和30年代後半

昭和30年代後半には、特筆すべき事柄はないが、非常な安定期であった。コールのスケジュールは次の如くである。

12月 役員改選、3月 演奏旅行、5月 五月祭、6月 六連、合唱協会定期、7月 夏合宿、11月 国立音楽祭(注3)、NHK青少年音楽祭(注4)、12月 定演。

変更やつけ加えは随時あったが、基本的には上の如くで、現在のコールにもうけ継がれている。

昭和37年には初めてヴォイストレーナーとして楠瀬一途氏を招き発声の専門的手ほどきを受けることになった。練習前のコール式柔軟体操も発明され、体操→発声→パート練習→アンサンブルといった一連の方式が確立した。また演奏の服装は、それまでの学生服にかわり、現在のブレザーが着用されるようになった。この頃は部

員が多すぎて、定演でも一年生のせなかつたこともある。総数120人余の時代である。

この昭和37年、駒場祭では、一年生が中心となって、自由企画として歌声喫茶を始め、最初はとても評判がよく、黒字になった分をプレザー代にまわした。この歌声喫茶は、以後しばしば行われている。

当時のコールについて福永陽一郎氏は、45周年記念定期にむけてのことばの中でこう記している。「……旧制大学時代の東大コールアカデミーは、名実共に、東京の代表合唱団であった。

近来、大学合唱の技術の向上は、学業のかたわら、趣味に専心するといった程度ではすまなくなる程、よくも悪くもプロ化してきて私立大学の、悪く言えば“ひまにまかせて”の猛練習に、東大の諸君が追いつけないのはいたしかたないのかも知れない。しかし本来学生合唱のあるべき姿のまま、フルに意欲を発揮している諸君には、拍手を惜しまない者でありたい。むしろ残念なのは、ときにあまりにも頭脳的なコーラスをきかせることで、願わくは年にふさわしい「若さ」のあふれる歌声をひびかせてほしい。」(第12回定演プログラムより。)

OB合唱団

ここで合OB合唱団の歴史を概観しよう。

戦前にはL. B. (Light Blue) 合唱団が最初に作られ、次にはY. O. B. (Younger Old Boys) 合唱団が生れた。このY. O. B. に対して、それ以前の人達によるものをO. O. B. (Older. O. B.) とも言った。戦後コールがコンクールで優勝した時のメンバーが主体になってオルフェオン・アカデミック(Orpheon Akademique) が結成された。そして昭和25年、若手のOBが中心となってこれらが統合され、コールアカデミーOB合唱団となった。それ以来この合唱団はしばらくの間は盛んに活動を行い、コンクールでも優秀な成績を取めたりしたが、天下の人材多く、多忙の為いつとはなしに活動を停止したが、昭和33年のコールの定期より、現役と

(注3) 東京地区国公立大学音楽会

都内国公立14大学で構成され、大学相互、学生相互の親睦を図り、課外活動の発展を期すという目的のもとに発足した。昭和29年に東京芸大で第1回の音楽会が開かれて以来、毎年1回、合唱、オーケストラが一堂に集まって演奏会をもっている。昭和44年には大学紛争のさ中で、当番校から、この音楽会に対する文部省の支配的立場が問題として提出され、44年以後、音楽会は停止状態にある。

(注4) NHK青少年音楽祭

世界的な文化団体、青少年音楽国際連合の一支部としてわが国ではNHKの力を得て昭和30年に第1回を開催。毎年、関西、関東で一回づつ演奏会が行なわれ、ラジオ、テレビを通して放送も行なわれている。

の合同演奏の形で復活した。昭和37年定期からは蘭田誠一氏の指揮で、OB単独ステージを持つに至った。昭和43年定期には現役の反対もあって実現しなかったが、昭和45年度定期には、現役との合同ステージを復活している。

V. 現代史 (昭和40年代)

§ 1. 充実期

さて、いよいよ昭和40年代に入るわけであるが、年間スケジュールはほぼ昭和30年代後半の形を踏襲している。

演奏旅行

昭和40年には中国、四国、41年には東海、関西、42年は関西、四国、43年は中部、北陸、44年は東海と、各々5回程度の演奏会を持っている。マネージはその地方の出身者が中心になって行なった。またこの演奏旅行は、2年生が主体となって担当した。12月に定期が終ると役員の交替となり、新役員の2年生が以後一年間コールの中心を担うのであるが、彼らにとって最初の仕事がこの演奏旅行なのであった。42年の大阪演奏会では立見が出て苦情が殺到したことは語り草になっている。なお45年には後に詳述するように関東で3ヶ所演奏会を持った後、ドイツ・オーストリアへ演奏旅行を行なった。

夏合宿

コールの活動にとって春、夏、秋の合宿は重要な意味を持っているがその最たるものは夏合宿である。これがいつ頃から始められたかは明らかでない。32年には秋合宿が開始され、演奏旅行が定着してからは春合宿もつけ加わった。夏合宿は東大野尻寮を主体にし、年によっては諏訪湖畔、山中湖畔でも行なった。合宿の終りには上級生を湖に投げ込むという行事が恒例となっている。

定期演奏会

アンコール曲にはウエルナーの“野バラ”が常にとり上げられているが、いつから第1アンコールに定着したかは明らかでない。またOB合唱団は昭和33年の定期から、現役との合同単独の形でステージを持っていたが、昭和43年の定期には現役の反対をうけ、以後活動は休止した。45年12月の音楽部50周年記念式典から活動は小人数ながら復活した。なお、OBの指揮は蘭田誠一氏であった。

前田氏とレパートリー

前田幸市郎氏の指揮での昭和40年前後のコールは、部員数も100名弱で、色々な点からも10年間の蓄積の上に安定した充実期を築いたといえる。第1回の定期以後毎年、レパ

ートリーには宗教曲を中心にした西洋クラシックが一つの柱として選曲されてきた。

- 29年 ドイツミサ曲 (シューベルト)
- 30年 アルトラブソディー (ブラームス)
- 31年 中世宗教曲集
- 32年 ドイツミサ曲 (シューベルト)
- 34年 ドイツミサ曲 (シューベルト)
- 35年 レクイエム ニ短調 (ケルビーニ)
- 37年 ミサ曲ハ短調 (リスト)
- 38年 レクイエム ニ短調 (ケルビーニ)
- 39年 第二ミサ曲 (グノー)
- 40年 荘厳ミサ曲 (デュオパ)
- 41年 荘厳ミサ曲 (ラバネロ)
- 42年 ミサ曲ステラマリス (グリースバッヒエル)
- 43年 ミサ曲ハ短調 (リスト)
- 44年 レクイエム ニ短調 (ケルビーニ)
- 45年 第二ミサ曲 (グノー)

これは、前田氏が西洋の宗教曲に造詣が深いためと、コールとしても正統的クラシック音楽の中により深い音楽性を見出そうという姿勢が定着してきたためと考えられる。

§ 2. 東大闘争とコール

医学部の研修医問題に端を発する医学部内の紛争は、昭和43年1月、医学部の無期限ストライキとなって明るみに出、続いて2月いわゆる“春見事件”によって、事態は急速に進展した。昭和43年3月の卒業式は遂にとりやめとなり、また4月の入学式は、デモとシュプレヒコールの騒然とした中で行われたが、それまで恒例となっていたコールアカデミーの演奏はとりやめられた。

43年6月15日の安田講堂占拠、17日早朝の機動隊導入という事件によって東大闘争は決定的な段階に進展した。文学部をかわきりに各学部が次々に無期限ストライキに入った。夏休みが明けても、ストが収拾するどころかかえって紛争は激化し、事務封鎖、研究室の封鎖や各セクト間のゲバルトといった実力行使がキャンパスをおおった。

機動隊導入の翌日6月18日には、練習後ミーティングが持たれ、コールは、大学内のサークルとして、どう対処すべきかについて話し合われたが、まだ部員の意識が低く、大した議論にはなっていない。

夏合宿を経て、9月に入っても、練習は、平常に続けられた。コールのスケジュールをいかにして立ててゆくかが、大きな焦点となっていた。紛争がいつ収まり、い

つ授業が再開されて、試験が始まるかは、12月の定演をはじめ、翌年春の演奏旅行などにも大きな影響を持っていたからであった。試験が、定演に重ならぬことを予想して、準備は進められていった。

10月の秋合宿では、スト中に演奏会を持つ或いは参加することの是非について、部員から、問題が提起された。10月末から12月にはDGK、青少年音楽祭、国公立大学音楽祭、そして定演という一連のステージが続いていたのである。

「東大という、我々共通の基盤が、このような状態に揺がされている中でステージを持つことは、良心が許さないし、また対社会的責任からも許されない。たとえ練習活動は続けるにしても、ステージは中止し、紛争解決に専念すべきではないか。」このような主旨の問題提起であったが、大方の意見は、これを否定するものであった。

・大学紛争という一種の政治活動と、コールという文化活動は別物であり、スト中でも文化活動は続けるべきだ。

・我々は常に闘争に関わっている訳ではない。闘争に対するとともに当然コールに関わる自己があってよい。

更に、大学の機能の中にはサークル活動もその一つであるから、スト中でも、サークル活動が実践されていることを社会に示すべきだという積極的肯定論も出た。執行部でも、会場や伴奏者、広告、チケット等、マネージが進んでいる中で、演奏会を中止することは今となっては許されぬ、と訴えた。

ともかく、この10月合宿の討論では、いくつかの部屋に別れて、少人数での討論も行った結果、「全体としては、ステージを持つことに賛成の意見が多く、ステージは持つ。しかし自分自身がステージにのるか否かは、個人で判断し、決定する余地がある。」という結論を一応見るに至った。

コール部員にはかなり積極的に闘争に加わっている者も少なくなく、そのために欠席したり、負傷を負って出席する者もあった。しかし彼らは、コール内にまでそれを広げようとはしなかった。いわゆるノンポリが多かったせいもあるが、コールは“歌う場所”とわり切っていたようである。だから、各自異なった意見、立場を持っていても、練習の時には一体となった。それでもクラブを去るものもいた。しかし、その理由をはっきり説明して去ったのではなく、去ることによって、何かをコールに訴えていたかの如くだった。コールとしてはこの段階で、12月の定演に向かってのスケジュールを消化してゆく以外になかった。

定演と役員交代

43年12月の定演は成功裡に終わった。リストのミサ曲をメインレパに配したものであり、メンバーは74名であった。

翌日からは新執行部のもとに活動が開始された。すでに幹部間には、翌々年のドイツ演奏旅行のことが念頭にあったようだが、さし当っては翌3月の演奏旅行を、この事態の中でいかに成功させるかということであった。

一方大学では、全学バリケード封鎖、大学廃校説が流れ、新年に入ると、スト取捨の動きが積極的になった。そして44年1月10日の全学集会、18～19日の“安田城攻防”そして1月末には入試中止など東大闘争の頂点が画されていったのである。

演奏旅行

44年の演奏旅行は、3月末から4月初にかけて、千葉、静岡、名古屋、広島、津山と、東海、山陽にわたる計画が当初の方針として打ち出され、マネージは進行していたのであるが、43年内において以後の予定が立たないこと、また、大学紛争が不評を買って受け入れ体制に不安が出てきた場所も出現したことなどによって、結局、千葉、静岡、名古屋の3ヶ所におちつき、例年になく小規模なものとなった。

DGK脱退

ここで、東大紛争には直接関係はないが、DGKを脱退した事に一言触れておこう。DGK (IV-§3を参照) に対する不満の声はこれより数年前から上っていた。発足以来10年を経る頃になると、発足当初の、コンクール主義に反発し、もっと自由で解放的な協会を造ろうという新鮮な意欲は変質し、協会内でも脱退問題が出るなど議論が聞かれるようになってきた。昭和43年頃のDGKはだいたい次のような諸点を確認しあっていた。

1. 歌う喜びと感動をまず自分達のものにし、更により多くの社会の人々と分かちあい、その上で、感動とは何かを明らかにしてゆこう。
2. その為にはまず曲の背景、作曲者の意図等を明らかにすることを各協会員が実践せねばならない。
3. また、曲と、自分との接点を求めるべく努力し、我々の或いは社会の人々の生活感情に根ざした曲をとり上げてゆこう。
4. そのような協会を造るべく、各団の民主的運営を徹底させてゆこう。

これらをコールの的に言いかえると、

1. 曲そのものに対し、或いは音楽的体験に対し、言葉が必要としていること。
2. 対社会的に(ある意味で政治的に)一つの運動体としてまとまろうとしていること。

3. 以上の点に合唱サークルとしての活動意義を見出そうとしていること。

コールが不満を感じていたのはこれらの点においてであった。つまり、「我々は前田先生の棒の下で歌うことにより、純粋に音楽的な何物かを表現したい。それは言葉で表現できるものではなく、演奏そのものでしか可能ではない。そしてそれによる音楽的感動を聴衆にも伝えたい。」ということである。長期にわたるDGK委員会での討論の結果、コールとして妥協の余地はないと判断し脱退を宣言、昭和44年6月、正式に脱退が成立した。

しかし一方、脱退によって、コールは合唱活動における現実の異なる立場を意識し、考え、それによってコールとしての活動方針をより正しく選択する機会を失ってしまったという見方も一部にはある。

なお、全国的に広がった大学紛争のあおりを受け、東京地区国公立大学音楽祭は、昭和44年以来停止状態にある。

§ 3. ドイツ演奏旅行

発端と経過

日本とドイツの大学学生の音楽団体を交歓し、日独の学生交流、日独文化交流を果そうという計画は、現在の音楽部長松田智雄教授を中心とする日本の関係者及び、ドイツ側の関係者の間で進められていた。昭和41年秋には、東大オーケストラがドイツ政府の外郎団体である学術交換奉仕会(DAAD)の招聘を受け、またオーストリアの大学の歓迎も受けて、ドイツ、オーストリアに演奏旅行が行われた。これをきっかけにして、42年及び44年にはチュービンゲン大学室内楽団が来日、また43年にはミュンスター大学マドリガル合唱団が来日した。この日独学生音楽団体の交歓に一応の完了を見ようとして、松田部長を中心にまとめたのが、コールアカデミーの訪独である。昭和43年9月27日に、この話が初めて松田部長からコールの委員に伝わったが、以後この話は急速にまとまり、44年4月にはコール総会にて、行うことを決定した。

決定はしたものの、コールの状況は、多くの問題をかかえていた。まださめやらぬ大学紛争は、以後の活動予定を不安なものにし、また肝心の発声など技術的な点でも心配は尽きず、財政面に関しても、相当の多難が予想された。新入生が入ってこないのも大きな問題だった。

見通し

財政面： 部員一人当たり旅費10万円を負担することにし、あとは、各方面からの寄附及び別に構成する旅行団から一部を援助してもらおうという形をとることになった。往きと帰りのチャーター機には、コール関係60名、旅行団90余名が同乗することになった。この一連のマネージに関しては、松田部長はじめコ

ール関係者の大きな努力が必要となるはずだった。

発声：昭和43年春からは楠瀬氏の後任として宮下正氏が、ヴォイストレーナーを担当していたが、音楽の本場で、日本のアマチュア合唱団が、果たしてどれだけのことがやれるのかという不安の中で、氏によせる期待は大きかった。

選曲：メインレパは、訪独具体化の先に、すでにケルビーニのレクイエムニ短調と決定していた。しかしドイツへ持ってゆくのは、ドイツ人による曲の方がよいか、ミサ曲自体の是非も問題となったが、結局、これは動かないものとなった。また、ドイツ、オーストリア側からの要望もあり、日本的な邦人作品として、間宮芳生氏の「男声合唱の為のコンポジション II」と、藤原義久氏の声明に題材を得た新曲「法華懺法」に決定。あとは、中世ルネサンス期のヨーロッパ合唱曲、及び日本とドイツの小品集、合計5ステージをレパートリーと決定した。

練習：44年4月訪独決定以後は、もっぱら同年11月30日の定演に向けて、週二、三回の練習を続け、それ以後は、週三、四回の練習を敢行した。理科生の多い中で、これは部員にとってかなりの負担であった。しかし上記5つのレパートリーをこなすには、必要な条件であった。特別演奏会：訪欧の前に、国内で3回、演奏会を持つことが企画された。例年3月には、演奏旅行を行うことが、恒例となっていたこともあるが、この特別演奏会には少なくとも次の3つの意味があった。

1. 訪欧前の事前予備段階としてのステージ。つまり、ステージ慣れと、レパの一応の完成という意味。
2. 次年度のコールの財源の確保
3. 次期コールの結束体制を固めること。

以上の意義づけのもとに、横浜、高崎、杉並で、1~2月に行われることになった。

部員の意志：訪欧を、どう意義づけ、どのように位置づけるかについては、何度もミーティングが持たれているが、そう深刻な議論にはならなかった。訪欧を、コールの合唱団体としてのまとめ、充実に役立たせようという積極的意義付けと共に、ヨーロッパへ行けるという期待にもとづいた消極的意義付けも各部員の中にはあったようである。訪欧後のコールについて論議されたこともあるが、結論の出るものではなかった。また、訪欧メンバーの決定においては、オーディションを行わず、出席率によって決定するという幹部の方針が貫徹されていた。

結局56名という、メンバーが最終的には資格を得た。

コールの訪欧の体制はこのような準備を着々と進めていったのである。

特別演奏会

事前に国内で行った演奏会であるが、これには、前記の意義づけがなされていた。昭和45年1月31日には横浜の県立音楽堂で、2月7日には高崎の群馬音楽センターで、2月8日には杉並公会堂でそれぞれ演奏会が行なわれた。杉並では、松田部長の説明、ドイツ、オーストリア側からの歓迎の言葉があった。マネージは、例年の演奏旅行と同じく、2年生が担当した。

ところで、ケルビーニのレクイエムは、オーケストラ伴奏付きであり、オリジナルな形でやってみたいという希望は当然生れた。44年11月の定期では、山口県出身者を中心として東京の音楽大学に学ぶ学生で結成されている萩音楽祭管弦楽団、45年2月の高崎演奏会では、地元の群馬交響楽団との共演が爽り、それぞれ、全曲を演奏した。ともかくこの曲は50分弱という、コールのレパのうちもっとも長時間を要する大曲であった。

ともかくも、この特別演奏会によって、訪独の準備体制が事実上整った。2月15日には赤坂プリンスホテルにて結団式が行われた。

ドイツとオーストリアにて

訪欧の日程表より抜萃。

- | | |
|-------|--|
| 2月18日 | SAS 機にて午後10時羽田発
(コール関係60名、旅行団90余名) |
| 2月19日 | アムステルダム着、午前7時市内見物 |
| 2月20日 | ケルン、ボン
ケルン日本文化館にて演奏会 |
| 2月23日 | ボン大学講堂にて演奏会
(2月20~23日 ボン郊外バッドゴードスベルク泊) |
| 2月24日 | フランクフルト、ハイデルベルクを経てチュービンゲン着。ドイツ学生との交歓会 |
| 2月25日 | 市長レセプション、ズィペート氏の案内による市内見物。大学講堂で演奏会 |
| 2月26日 | シュツットガルトにて演奏会 |
| 2月27日 | トロッシンゲンにて演奏会
(2月24~27日、チュービンゲン泊) |
| 2月28日 | ウルムを経てミュンヘンへ
ミュンヘンにて自由時間
(2月28日、3月1日 ミュンヘン泊) |
| 3月2日 | オーストリアへ。ウィーン泊 |
| 3月3日 | グラーツ着。
演奏会、グラーツ泊 |
| 3月4日 | グラーツ市長レセプション、ウィーン泊 |
| 3月5日 | 午後3:30 ウィーン空港より帰途につく。 |
| 3月6日 | 羽田着 |

なおケルン及びグラーツにおいてラジオ放送用の録音を行なっている。

この訪欧旅行は、以上のように6回の演奏会を中心とするものであったが、少ないながらも自由時間を利用し、当地の文化に触れたり見聞を広める上において、部員一人一人に与えたものは大きかったということを付記しておく。

さて、コールの演奏に対する地元新聞等の論評の主なものをここに引用してみよう。

ボン GENERAL ANZEIGER 紙 I.B. 氏評 (2月25日付)

「すばらしい声の同質性をめざし、細心の注意をもって訓練された合唱団」

チュービンゲン SÜDWEST PRESS 紙評 (2月27日付)

そのやわらかな音の流れは、一度ならず修道僧の歌声を思わせた。……非凡な声質のみならず、その驚くべき変化の能力をもって我々の心をとらえた。

トロッシンゲン TROSSINGEN ZEITUNG 紙 H.W. 氏評 (3月2日付)

何かの都合で聴きに來られなかった者は、めったにない素晴らしい夕べを逃したことになる。

グラーツ KLEINE ZEITUNG 紙 KARL HAID-MAYER 氏評 (3月5日付)

その響きの質、注意深いイントネーション、きめの細かい強弱の変化と並んで、発音の明瞭さが賞賛するべきものとして際だっている。

グラーツ NEUE ZEIT 紙 DIETMAR POLACZEK 氏評 (3月6日付)

この演奏会によって、この地方の冬の音楽界は太陽を取り戻した。

§ 4 現状と今後の課題

ドイツ・オーストリア演奏旅行は、コールアカデミー史上の一大事業であり、それだけに、コールの総力を費やしたものであった。東大闘争という異常時の中で準備が進められたこと、理科生が多く、そのスケジュールがかなりきついものであったこと、部員ほぼ全員参加した事業であったこと、このような状況の中で、毎日のように組まれた練習日程が消化されていったのである。

演奏旅行後、四月の新学期開始と同時に活動は再開されたが、前途は多難が予想された。一つは、一大事業後の精神的虚脱状態がぬぐい切れなかったことであり、二つには、東大入試中止による二年生の欠如、及び新入部員が少数なこと、三つには、指揮者の前田氏がドイツに滞在されるということ、以上のハンディキャップを背負っていた。特に部員は少なくなり、通常の練習は30名余という状態が続いている。2年生の欠如も大きい、各学年のスケジュール異変ということも大きい。各学部の試験日程は異なり、そのため、それらのスケジュールの間隙をぬった合宿に大きな比重がかけられた。また10月には一年生以外は皆本郷学生となり、特に理科生は過密ダイヤに追われてかなり苦しい状態であるのも否めない。このような状況下で、六連、50年祭、46年1月の定期、オケの“第九”参加へと、活動は進められた。

さて、合唱人口の減少は、ここ数年来一般的な傾向であるが、ある程度の頭数は、合唱を行う上での基本条件であり、部員の確保は今後のコールにとっても大きな課題である。これには大きな努力が必要とされるだろう。また、様々な文化様式が氾濫する現代において、合唱活動を行なってゆく意味を再度考えてみることに、更には、大学や職場数の何倍もの合唱団が存在する合唱界において、コールアカデミーをどのように位置づけ、どのように発現してゆくかを問い直すことが、50年の歴史を経た現在という歴史的時点で必要とされていると言える。

おわりに

このコールアカデミーの歩みの執筆にあたっては、努めて、客観的史実をもとにするようにし、また特にコール定期開始後の17年間に重点をおいたつもりです。それ以前については、先輩諸氏による回想録を併読していただきたいと思います。なお、この文章の責任は全面的に執筆者にあります。記事や表現の誤りについては、お気づき次第御指摘いただければ幸いです。最後に、記事や資料の取材、OB 回想録依頼に際し、多くの先輩諸氏の御協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。(執筆者 市井善博)